



もりやま
「守山大塚古墳」と「雲仙市歴史資料館・国見展示館」

毎月、島原半島内のジオサイトやその見どころを紹介するこのコーナー。今回は雲仙市吾妻町の守山大塚古墳と、同市国見町の雲仙市歴史資料館・国見展示館です。



守山大塚古墳

諫早方面から堤防道路を経由して島原半島に入り、そのまま雲仙グリーンロードに向かって道を進むと、左手に墓地になっている小高い丘が見えます。この丘は自然の地形ではなく、人の手によってつくられた「古墳」です。

守山大塚古墳は、幅51メートル、長さ70メートルに達する前方後円墳で、県内の前方後円墳としては、吉岐市の双六古墳に次ぐ2番目の大きさを誇ります。この古墳がつくられたのは、古墳の周りから出土した土器片の様式から、4世紀前半（約1700年前）ころと推定されています。

通常、前方後円墳は全体を「葺石」と呼ばれる石で覆い、古墳を美しく飾るとともに、雨風から古墳を守ります。平成20～21年に、守山大塚古墳の周囲で行われた発掘調査の際には、葺石と思われる人の頭ほどの大きさの丸石が大量に出土しました。太古の人々は、田内川が運んだ角が取れて丸くなった雲仙火山の溶岩を用いて、大切な古墳を守ろうとしたの



守山大塚古墳の全景
(雲仙市教育委員会提供)

古墳の上は墓地になっています

でしょう。しかし、奈良時代以降、島原半島北部では多くの水田や畑がつけられるようになりました。地面は平らにならされ、多くの遺跡や古墳が失われたことでしょう。にもかかわらず、守山大塚古墳が残ったのは、そこに埋葬されている人物に関わりがあります。

守山大塚古墳がつくられた当時、日本を治めていた大和朝廷にとって、農作物の確保は大変重要でした。雲仙火山の噴火と長い年月がつくり上げた肥沃な土は豊かな農作物を産み出す貴重な天然資源だったのです。よって朝廷は、肥沃な土が広がる土地の管理を、信頼する重要人物に任せていた可能性があります。守山大塚古墳が円墳でなく前方後円墳であることも、これを裏付けます。前方後円墳は朝廷と関わりの深い人物しかつくるこ

とができなかったのです。つまり守山大塚古墳には、朝廷や地域の人にとって特別な存在といえる、有力な豪族が埋葬されているかもしれないのです。



雲仙市歴史資料館・国見展示館

雲仙市歴史資料館・国見展示館には、守山大塚古墳周辺で行われた発掘調査の成果に加え、島原半島の北部に点在する複数の遺跡から出土したさまざまな出土品が、時代順に展示されています。旧神代中学校の校舎を利用したこの展示館で、およそ3万年間にわたって島原半島で繰り広げられてきた、人々の営みと歴史を感じてみませんか。

今回は、昨年11月17日にユネスコの正式事業となったユネスコ世界ジオパークに関する最新情報を紹介します。



雲仙市歴史資料館・国見展示館

旧神代中学校の校舎